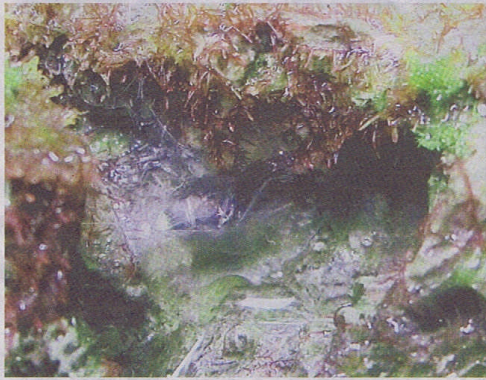


水没下でも巣に網を張り空気を確保するアワセイソタナグモの雄=11月16日、泡瀬干潟(下謝名松榮さん撮影)



アワセイソタナグモの雄=11月15日、泡瀬干潟(下謝名松榮さん撮影)



アワセイソタナグモ

新種クモ発見

元琉球大学教授 下謝名さん 水没生息は世界初

泡瀬干潟

元琉球大学教授の下謝名松榮さん(73)は浦添市が、沖縄市の泡瀬干潟で新種「アワセイソタナグモ」(和名)を発見し、最新の日本蜘蛛学会の学会誌「Acta Arachnologica」(12月31日発行予定)に掲載した。イソタナグモ属はこれまで世界で9種が確認されており、アワセイソタナグモは10種目。これまで確認されているイソタナグモ属のクモは海浜の満潮線より陸地に生息していたが、アワセイソタナグモは、満潮時に海水に水没する範囲(真潮間帯)で生息する種として世界で初めて確認された。

下謝名さんは「極めて貴重で、生態を分析することは非常に価値がある。生息域は限定されており、より一層の研究が必要だ」と語っている。アワセイソタナグモは沖縄本島の固有種で、これまで確認された分布域は泡瀬干潟のみで、学名Paratheauma(Paratheauma awasensisi)と和名は発見された場所に由来する。生殖器の形状や体長から新種と判別できた。体長は約3・5〜5ミリ。



下謝名松榮さん

下謝名さんによると、イソタナグモ属は環太平洋地域や中米に分布する海浜性のクモで、砂浜や護岸に生息するが、溺れてしまったら海水中には潜らないと認められてきた。アワセイソタナグモは、満潮時に水没する場所で、石の下のくぼみにシート網を張り、空気を確保する巣を作る。下謝名さんは「なぜ海水の中で居住するように適応、進化したのか、解明するのはこの種しかない」と強調する。アジア国際クモ学会会長で国立科学博物館の小野展嗣(理化学博士)は「イソタナグモ属のクモで水中生活に適応する能力を獲得した例は珍しく、特筆に値する」と評価した。琉球大学風樹館の佐々木健志学芸員は「ユニークな生態であり、開発の危機にさらされている泡瀬干潟で発見されたことに意味を感じ、今後の調査が大切だ」と語った。(関戸塩)